
環の市中見聞録

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

環の市中見聞録

【Nコード】

N0112P

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

女子高生の椎堂環は、行き倒れということと人生で初体験した。助けてくれたのは、色白の役者みたいな顔の小野崎龍三。彼の知っている世界と、環の知っている世界は違っていた。

どうやら、環はタイムスリップしたようで？！……刀で自分の居場所を切り開くファンタジー小説

世界が変わった日

どうやら、私は生まれて初めて行き倒れということをしたらしい。目を開けたら見慣れない天井で、すぐ横から若い男の声がした。

「気がついたね、大丈夫か？」

私は、声のした方へ顔を向けると漆黒の髪を後頭部の高い位置で結んだ色白の美丈夫が気遣わしげにこちらをみていた。

「大丈夫です」

私はきちんと答えたつもりだったが、声が枯れていた。こんなに衰弱するなんて、なにがあったのだろう。

「屯所の前で倒れていた。飯は食べそうか？」

屯所、というのがなんだかわからなかったが、道の上で倒れて意識を失っていたらしいことはわかった。私は、ありがたく食事を頂くことにした。

黒髪の美丈夫は、ひとつ頷くとそっと立ち上がって部屋を出て行った。

私が寝かされている部屋は、布団の敷かれた和室だ。障子紙の模様は、若竹を描いた透かし模様がはいつている。先ほどの黒髪の美丈夫が出て行った襖には、松の絵柄が描かれていた。

しかしおかしなことに、天井には、電灯がない。間接照明で夜は灯りを得ているのかもしれないが、行灯型のランプシェードからは、コードが伸びていない。仮に、コードは巻き取って収納しているとしても、私が見える範囲には壁にコンセントが無かった。

不思議な部屋だ、と思っていると先ほどの青年が声をかけて部屋に入ってきた。

青年は、木製のお盆にお椀と小鉢をのせて持ってきた、椀からは温かな湯気がでていた。

「食事だ。長いこと寝ていたから、ゆっくり食べる」

「私はそんなに寝ていたのですか？」

親切にも、青年は私の背中に手を置いて起こしてくれた。

「三日程だな」

青年は、私にお盆ごと食事を進めてくれた。

青年は、着物に袴姿だ。和装が珍しい現代に、ちゃんと着こなしている。

「あの……私は椎堂環と言います」

私は食事に手を付ける前に、食事の礼を言うために名前を尋ねた。

「俺は、小野崎龍三だ。お前を拾ったついでに面倒をみている」

歳の頃は二十代半ばだろうか。役者のように整った顔立ちだ。

私はご飯に手を付けた。椀には温かい粥と、小鉢には胡麻で青菜が和えてあった。

粥をすするように口に運んだ。じんわりと米の甘さを感じた。寝ている間に喉が乾いていたらしく、潤っていくのがわかった。

一口食べて、ほっと一息つくとき小野崎さんが微笑ましそうに笑った。

「ここは、何処なんですか？」

私は起きた時から疑問に思っていたことを口に出した。

そう、何となく嫌な予感がするのだ。

「何処つて、江戸だ。そんな事も分らないのか？」

頭、大丈夫か？と言いたそうな青年の訝しげな視線をこれでもかと私は受けた。

江戸という名称が使われていたのは、徳川家康が幕府を開いてから維新により政治の中枢が幕府から朝廷へと移るまでだ。

本当に私のいるこの場所が江戸というのなら、騙されているか、タイムスリップしたかだ。

「江戸のどこですか？」

小野崎さんがあまりにも、不審そうに睨むので私はなんで事無いようにさらに聞き返した。

私を騙そうというのなら、いつか何処かでボロがでるはずである。

「市中見回り組みの屯所だ。道端に倒れてびくりともしねえから、若い女の土左衛門だと大騒ぎだった」

市中見回り組み、なんかそんな名前の場所は本当に江戸にありそうである。

「お前、家は何処だ？家族が心配してるだろ？」

「家？家族？……居るのでしょうか」

「まさか、わからねえとかいわねえよな」

「わかりません」

本当は、あなたの言う江戸にいるか分かりませんが、正しい言い方だがこの際適当に相手の都合の良いように受け取れるような答えを選んでおくことにする。

「しょうがねえな。先生呼ぶからまつてろ」

待つてるもなにも、久しぶりに起き上がったのでなんだかまだ、頭がクラクラする。

「待つて居る間、横になつていても？」

「まだ、本調子じゃねえのか。寝てろ。来たら起こすから」

口調はぞんざいだが、小野崎さんは随分優しい人のようだ。私が横になるのを待つてから、部屋を出て行った。

そつえば、私が着せられて居るのは着慣れた洋服ではなくて洗いざらしの浴衣だ。

旅館などで着るようなポリエステルが混じった皺になりにくい生地にしたてではなくて、綿百パーセントの肌触りの良い浴衣だ。

白地に濃紺のアサガオが染め抜いたガラだ。

まさか、小野崎さんが着せ替えた訳でもあるまい。小野崎さんの口ぶりからして、ここには複数人数の人がいるようだ。

うつらうつらとしながら、医者が来るのを待つていると、体を揺さぶられて目を開けた。

小野崎さんともう一人、無精髭に白髪がごま塩混じりの男が座つていた。

ああ、……どうやら、タイムスリップしたみたいだ。

もう一人の男は、小野崎さんと同じように着物姿に袴だ。さすがに一人を騙すのにここまでやらないだろう。

「気分はどうかね、ご新造さん」

私の事を「ご新造さん」と言うだなんて、私のいた時代では考えられない。

「頭がクラクラします。あと、後家です」

ご新造さんというのは、結婚した若い女に使う言葉だ。私は結婚した覚えはないので、未婚であることを伝えた。

「弁財天もかくや、というほどの美人が後家とは野郎どもはなにをやってるんだか」

医者、私の腕を取って脈を測りながら小野崎さんを見た。

「俺は助けただけだ」

「満更でもないだろう。普段は女なんかしらん、という男が親身になって世話してるときいたら、何かあるとおもうだろうが」

行き倒れていたら、そんなの関係なく人として世話をすると思んだけど。

「余計な勘ぐりをするな。……で、先生、どうなんだ？」

「衰弱してるぐらいで、幸いなことに病ではない」

「自分の住んでた場所が分からないんだと」

「ちよつと混乱してるだけだろ。ほうつておけば戻る」

?? 思惑通り、記憶喪失扱いになったみたいだ。ただし、二度と記憶の戻らない記憶喪失だけだ。だって、ここに住んでいた覚えはないのだから。

「じゃ、先生の所で預かってくれよ」

「拾ったなら最後まで面倒をみる」

「男所帯に置く訳にはいかねえ」

?? 仮に江戸時代だとしたら、市中見回りのような荒事を仕事とするなら、メンバーも男ばかりだろう。

?? あれ? ということは、誰が着せ替えたのかな?

?? 二人は、何だかんだと私の所在について押しつけあっている。

?? 家も無ければ、家族もないという不審者を引き取るうなんていう人は、さすがに居ないみたいだ。

「あの、直ぐにでも出て行きますから」

「??タイムスリップしていても、言葉は通じるみたいだしなんとかやっていけるだろう。」

「お金が無いのが困るが、持ち物を売ってもいいし、働き口も見つければいい。」

「私が床から起きようとする、小野崎さんが眉を顰めて私をみていた。」

「まだ、調子悪いんだろ?」

「お邪魔のようですから、失礼します」

「??頭がクラクラするが、歩けないほどではない。私が来ていた服を返してもらって、外に出よう。」

「待てよ」

「??小野崎さんは、出て行こうとした私の腕を取った。」

「治るまでここにいてかまわない。ふらふらな人間を外に放り出せるかよ。だいたい、どうやって生活するつもりだった?」

「……体も売り物になりますね」

「??ここに暫く滞在してもいいなら、さっさと言えよと思ったので、ちよつと意地悪な解答をした。」

「??思ったとおり、小野崎さんはますます眉をしかめて世界が終わったかのような表情を浮かべていた。」

「軽々しくそんなこと言うな。後家とはいえ、生娘だろうが」

「追い出されたら、そうするしかないです」

「??私の返答に小野崎さんはますます苦々しそうな表情だ。」

「??私と小野崎さんのやりとりに、医者が笑った。」

「もう、謝ってしまえよ。龍三」

「俺に非はない」

「??が、頑固者ー!」

「ま、なんかあったら知らせろ」

「??医者は、さっさと帰り支度をして部屋を出て行った。」

「??小野崎さんは、溜息をついて私を見た。」

「体調が良くなったらでてけよ」

「??まったく、一言多いったらない。それでも私は黙って頷いた。

「何か暇つぶしできそうなものはないですか?小野崎さんもずっとここに居る訳にはいかないでしょう」

「読売がある」

「??瓦版のことだ。

「??せっかくなので、持ってきてもらった。瓦版に日付ぐらい入っているだろう。」

「??小野崎さんが、持ってきたのはうすぺらい紙だ。ロール状だったので、広げてみると何も印刷されていない。

「??まさか、印刷ミスを持ってきたわけはあるまい。

「??私が不思議に首を傾げていると、横から小野崎さんが紙の端の糊代部分をおした。

「なんだ、読売の読み方もしらないのか」

「??小野崎さんの言葉に合わせて、まるでスイッチが入ったように何も書かれていなかった紙面に文字が広がった。

「??何この魔法みたいなこと……!」

「??まるで、この読売が薄い電子媒体で電源が入ったから文字が表示されたみたい。

「何驚いてんだよ」

「??小野崎さんにとつては、これが当たり前なんだ。

「??私は恐る恐る読売の紙面に目を落とした。私の知っている新聞と同じ書式で、一番上の横書きで日付が書かれている。

「??西暦ではない。年号でもないみたいだ。

「??なに、この宇宙暦って……!」

世界が変わった日2

本当に悪い予感しかない。てっきり過去に遡ったのかと思っていたら実は思いつきり未来でした、というオチなんじゃないだろうか。宇宙歴とか、SFドラマの中でしか見たことないし。

ざっと紙面に目を通して見る。日本語で書かれているから読めそう。よく分からない単語とかあるけれど、新しい名詞かもしれない。概ね、意味は分かる。

むしろ、ちよつと古めかしい言い回しがあつたり、私自身、生活の中で使ったことのないような言葉が当たり前のように使われている。記事から推察するに、おそらく有名人と思われる人のスキャンダルが興味本位で書きたてられていた。時代が変わっても人の興味は変わらないみたいだ。

「あの、何か？」

先ほどから小野崎さんが私の顔じつと見ている。私の話し相手をしなくても良いように読売をもらったのに、何か言いたそうにこちらを伺っていた。

私に指摘され、小野崎さんは言葉にならない眩きをして逡巡したあと、ため息をついた。それで決心がついたのか眼光鋭く私を見返す。「仕方がないこととはいえ、俺が着替えさせた。すまなかつたな」そんな情報知りたくないです！

知らせなければ、誰か女中さんとかにやってもらったのかな、と推測して気まずくなることも無いというのに。

私は、我知らず顔が赤くなるのを感じた。こういうのは、自分で赤くならない様にできない。

「き、気にしてません」

我ながら声が上ずっている。

思いつきり、気にしてますとも！

私が建前で答えたのを気がついた小野崎さんは、ますます眉間にシ

ワを寄せる。

まるで、顔が赤くなつた私が悪いみたいだ。

「何かあつたら呼べ」

収集がつかないと判断したのか、小野崎さんも、うつすらと耳を赤くしたまま部屋を出て行つた。

なんだ、あの年齢で意外と純粋なのだろうか。女の人を泣かせそうな容姿の持ち主なのに。

私はまた、眠くなるまで読売の記事を読んだり、読売の電源スイッチを押したりと暇を潰した。

試しに立ち上がってみたが、酷く眩暈がして歩くのも辛い。これは、相当ダメージを受けていそうだ。

屯所、というのはどうやら私のいた時代に照らし合わせると警察＋機動隊のようで、始終がやがやと騒がしい。男の人の声しか聞こえない。

私の部屋には近づかないように指示されているのか、騒ぎは聞こえても直接誰かと話すことは無かった。

障子から、夕陽が差し込む時刻なつて再び小野崎さんがやって来た。

「湯浴みの支度ができた、歩けるか？」

立ち上がったのは良いものの、やっぱり眩暈がする。

先ほど、トイレに行つた時にも眩暈がして小野崎さんに抱えていってもらつたのだ。

小野崎さんはため息をついて、私の膝裏と背中に手を回して横抱きにした。

すぐ近くに秀麗な顔があつて自然と頬が熱くなる。借りてきた猫のように大人しくなつた私を、小野崎さんはニヤリと笑って見下ろした。

俺は女なんか抱き慣れてるぞ、って事ですか。

捕まらないと振り落とされそうなので、仕方なく小野崎さんの首に両手を回す。小野崎さんの胸に頬を当てる事になるので、鼓動が聞こえてきそうだ。

「あつれー？小野崎さん、屯所に女なんか連れ込んでるんですか」
部屋を出てすぐ待ち構えていたかの様なタイミングで、第三者から声をかけられた。

からかうような声音は、小野崎さんと親しい仲のようだ。

「馬鹿言え、行き倒れを拾ったと言っただろうが」

「美人だからって、下心見えてますよ」

「アホ」

小野崎さんは、先ほどから馬鹿とアホしか言っていない。いつもからかわれているから、反応が淡泊なんだろうか。

それでもきちんと反応を、返すものだからからかいがある。

抱きついていて私の顔を覗き込んできたのは、小野崎さんよりも歳下でどちらかというと私と年齢が近そうな青年だ。

小野崎さんよりも背が高いのか、少し屈むようにして私を見ている。

「小野崎さん、趣味変わりました？」

女の趣味が変わったと聞きたいのだろう。小野崎さんは美丈夫なので選びたい放題だろうから私みたいなタイプは、選ばないに違いない。

「お前、人の話を聞いていたか？」

飽きたようにため息をついて、小野崎さんは歩き始めた。

「聞いてましたって。女なんか泣かせてなんぼ、みたいな人が湯浴みさせるために甲斐甲斐しく世話をするなんて信じられないだけです」

小野崎さんの後ろをつけながら彼は言った。抱え上げられている私は、小野崎さんの背後がよく見えるので、名前の知らない彼と目が合った。

彼はにやり、と意地悪そうに笑った。

大方、私がわがまま言っただけ世話をしてもらっているとも思っているのだろう。

事実ではないし、かと言って降ろされても歩けないので小野崎さんと同じように放っておくことにした。

「記憶喪失とか言われたら、放っておけないだろうが」

「どうですかね？」

今度は、先ほどより低い声だ。彼は、私を鋭く睨んでいる。

彼は、私の存在が疑わしいようだ。記憶喪失の振りをしているのではないかと疑っている。振りをしていたからと言って、何か害をもたらすのか分からなかったが、気に食わないというニュアンスは伝わった。

小野崎さんは、引き戸を開けて中に入った。

？ 集団生活をしているのか、広い脱衣所だ。旅館の脱衣所と言って良いぐらいだ。

？ 私をそこへ降ろすと、外で待っているから使えと小野崎さんは言った。

？ 今だに不平不満をつぶやいて居る彼を押し出す様に小野崎さんは、外側から引き戸をしめた。

？ お風呂に入れるのは嬉しいですけど、私、歩くだけで眩暈がするって言いませんでしたっけ？

世界が変わった日3

なんとか服は脱げた。脱衣所から風呂場までほんの数歩という距離だが、なんだか目眩がして酷くゆっくりではないと歩けない。

せつかくだから、汗を流したいのにこの分だとお湯に浸かるだけしかできないかもしれない。

引き戸をあけると、思った通り銭湯みたいな風呂場で湯船が大きい。洗い場の蛇口もたくさんあった。私は、かけ湯をして湯船につかる。湯の温度は、ちょうど良い温かさでじんわりと肌に熱が伝わってきて心地よい。

生き返るな、と香気に思っているとだんだんと頭がすっきりしてきた。

まさか、未来だから湯船に体調を良くする薬が溶けてるとかは、無いよね。

見た目は、至って普通のお湯で入浴剤すら入っていない。温泉で訳でもない。

ただ単に、体温が低くて具合が悪いただけだったのなら大助かりだ。小野崎さんだけなら、親切な好意に甘えて体調が全回復するまで居させてもらうが、先ほど会ったあの青年は良くない。

あそこまで何かを疑われていたら居心地が悪い。

一見して普通の女子高生のつもりなのに、なんであんなに睨まれるのかな？何かやるにしても一人ではできないと思うし。

つらつらと、今日あったことを考えながら髪と身体を洗った。汗をかいていたみたいで、さっぱりとした心地だ。

もう一度湯船に浸かってから、お風呂からあがった。脱衣所に行くのと、どういうわけか先ほどの青年が仁王立ちして待ち構えている。

あ、えーと……私、裸じゃ無いか？

しっかりと青年と目が合って、今の状況に気がついた。湯船に戻ろうとしたら右手をつかまれる。青年が私の手を後ろに回し、動きを

封じる。

痛いっ。容赦ないよ、この人！

涙目で、振り向きながら青年を見上げる。本当にノッポだ。

青年は、恐ろしく落ち着いた視線で私を値踏みするように上から下まで見つめる。

「あんたが、よからぬことを考えてるのはわかってるんだ」

「なんのこと？」

私は、分からなくて聞き返したら押さえる手に益々力が込められる。

「痛いって」

「参謀長に取り行つて何を企んでる」

「誰よ」

サンボウチヨウなんて、名前の人にはあつた事ないはずだ。

「シラをきるつもりかっ」

後ろ手になるように押さえられていた手を元に戻され、力任せに青年の方に向き直される。

私、裸でなにされてんだろ……！

青年に顎を掴まれて、強制的に上向きにされる。

「身体に聞いてもいいんだぜ？」

ニヤリと、青年は良くない笑いをした。これは、ピンチだ。本気で、私に何かしようとしてる。

「離してよ」

両手を抑え込まれているので、振りほどこうと手を降るが全く離してくれない。私が慌てているのが楽しいようだ。

ナニコレ、どんだけSなのこの人！

壁際に追い込まれて、頭をしたたかに壁にぶつけた。一瞬、息が詰まる。

まずい、後が無いぞ。

私は、助けを求めるために唯一この場所で知っている名前を叫んだ。

「佐次郎、何をしてるっ」

脱衣所の扉越しに小野崎さんの怒鳴り声が聞こえた。

「やだなあ、まだ何もしてませんよ」

私を押さえつけたまま、青年は答えた。この人、佐次郎といふのか。「何もしてないやつが脱衣所から答をかえすか。目を離れた隙に、勝手をするな」

いうや否や小野崎さんは、勢いよく脱衣所の扉を開けた。私は、両手を押さえつけられているので裸を隠す事もできず出入り口に立つ小野崎さんを見た。

まさか小野崎さんも、私が濡れたまま佐次郎青年に好きなようにされているとは思っていなかったようで、目を丸くして驚いていた。またしても、私の裸は小野崎さんにまで見られている。服を着替えさせたそうだから、私の裸なんてとくに見てるでしょうけど、私に意識があるのと無いのでは大違いだ。恥ずかしい。この体制、どうにかしたい。

「離せ、佐次郎。命令だ」

小野崎さんは、先ほどの怒鳴り声とは打って変わってやけに静まり返った底冷えのする声で佐次郎青年を諫める。

鋭い眼光で、佐次郎青年を睨みつけると、さすがの彼も私を押さえつけていた手を離れた。

離してくれたとはいえ、やっぱり彼のそばに居るのは恐ろしいので小野崎さんの方へ行こうと脚を一步踏み出した。しかし、足に力が入らずそのまま床に崩れ落ちた。

どうやら、腰が抜けたみたい。

世界が変わった日4

小野崎さんは、湯上りのまま腰を抜かして床にへたり込んでいる私を哀れんだのか、タオルを頭から無造作に被せてくれた。

「とりあえず、身体拭け。外にいる」

小野崎さんは、まだ疑いの眼差しをやめない佐次郎青年を引っ張りながら脱衣所を出て行った。

私は、座ったままタオルを頭から取って身体を拭いて浴衣に着替えた。

浴衣に着替えて安心したのか、気がつかないうちにポロポロと涙がこぼれ落ちた。

？泣いているのだ、と自覚すると止められなかった。そのまま、声を殺して泣き崩れる。

「おい、どうした？」

？着替えるのに時間がかかっているのを、心配してか小野崎さんがドア越しに声をかけた。

？まだ、佐次郎青年も一緒にいるらしく物騒な言葉まで聞こえてきた。

「ほら、だからさっきさっさと殺っちゃえば良かったんですよ。今頃逃げて……」

？佐次郎青年の言葉が終わらないうちに、小野崎さんが脱衣所のドアを開けた。

？この人達には、ノックという概念がないのかしら？

？私は泣き顔のまま、びっくりして顔を上げた。

？小野崎さんは、蹲っている私をみて酷く驚いた表情をした。佐次郎も、おや？と声にだして私がいることに疑問を、持っているようだ。

「泣いて……いたのか」

？小野崎さんが痛ましい者でも見るように、眉根を寄せて私を見る

ので違うというように首を横に振った。

「それが余計に痛々しい印象を与えたようで、小野崎さんは「怖がらせて済まなかった」と言って座っている私と目線を合わせた。

「膝について座り、小野崎さんは涙の流れる私の顔をタオルでゴシゴシと拭く。

「ちよつ、そういう時は優しく拭くものでしょつ。

「タオルで擦られたのが痛くて、涙が引っ込んでしまった。

「立てるか？」

「小野崎さんは、手を差し伸べてくれたが私はその手が怖くて、掴むことができない。

「痺れを切らした小野崎さんは、私の両手首を強引に掴んだ。一瞬、私の身体に震えが走る。私のどうしようも無い反応に、小野崎さんは気がついて居たようだけど、無視して私を抱き上げた。

「？？また、怖いと思った。

「怖いかもしれないが勘弁してくれ。ここに座りっぱなしさせるわけにもいかねえ。俵担ぎより良いだろ？」

「？？俵担ぎだと、頭が逆様になる上に臀部が小野崎さんの顔の横に来るわけだ。

「？？無理。そんな恥ずかしいことはできない。

「このままで良いです」

「？？私は、消えいる様な声で答えた。

「？？先ほど使っていた部屋に戻されて、無造作に布団の上に降ろされた。荷物運びよりまし、という程度の扱いだ。

「すまなかったな、佐次郎にはいい聞かせておく」

「僕、何も悪くないですよ」

「？？開き直っている佐次郎の頭に小野崎さんが拳骨を居れる。

「いったーっ。何するんですか」

「？？殴られる良い音がして、佐次郎は頭を押さえた。

「お前は、よく考える。馬鹿者」

?? こいつには、よく言ってきたからと少しだけ怒った表情で告げると小野崎さん達は、部屋から出て行った。

?? 私、これからどうなるんだろう？

世界が変わった日5

夜が明けて、全てが夢であればいいとどれだけ思ったか。

私は、結局、一睡もできなかった。夜が明けるのを息を殺してじっと待っていた。

幸い、体調は悪くない。

こんな怖い所早く出て行きたい。

朝を告げる鳥が、近所の庭で声を上げた。

すでに、此処に住まう人は起き出したようで雨戸を明ける音や、障子を開け閉めする音が此処まで聞こえて来た。力強く廊下を歩く音も響く。

その中で、ヒタヒタと落ち着いた足音がこちらに向かって来た。足音の主は、私の居る部屋の前で立ち止まり、膝をついた。

「俺だ、起きているか？」

小野崎さんだ。

私が起きて居ることを告げると、障子が、開いた。私の顔をみて眉根を寄せた。

「寝て無いのか？」

「あんなに眠っていたから、眠れません」

私が答えると、小野崎さんは飽きたように首を横に降ってため息をついた。

「限を作りやがって、怖くて眠れなかったんだろう？……済まなかったな。嫁入り前の娘さんにとったら、死にたいほど辛いことだろう？」

布団の上で座っている私の傍に、小野崎さんは座った。

怖い、といえば、怖い。夜中に部屋にやって来て襲われるとは思わなかったけれど、目をつぶればあの時の光景が目に見えかぶ。

とても、目をつぶれなかった。

小野崎さんが、私の頭に手を伸ばすのを、私は体制を変えることで

避けた。ワザとらしくしなかったつもりだけれど、小野崎さんにはお見通しだったようだ。行き場の無い手をそっと降ろして、哀しそうに私を見つめる。

小野崎さんが悪くない、というのは分かつては頭では分かっているが、今は、男の人が怖い。

「私、大丈夫ですから、此処を出たいです」

「しかし……」

元々、体調が良くなるまでという話だった。もう、元どおりなのだから此処を出ても構わない筈だ。

「万全じゃねえだろ？」

「いつまでも、ここに居る訳にはいきません」

「ダメだよ。君、危険人物だと思われてるの解らないの？」

何時の間にいたのだろう。佐次郎が、部屋の障子を開けて仁王立ちしながら私を見下ろした。

私が悲鳴を、上げるのを小野崎さんが、私の口を手で抑え込むことで出させないようにする。

小野崎さんに体を抑え込まれ、口を覆われてわたしはパニック状態になった。

怖い！

手を動かして、押さえ込んで居る小野崎さんの手を振り払おうとしているのにビクともしない。

益々焦りが増して、首を横に降ったり、足をばたつかせているのに、降り解けない。

怖い？

泣いたら余計に自分の状況がどうなるか解らないから怖いのに、あつという間に視界がぼけて、涙が頬を伝う。

怖い、ヤダ！

私は、急に息苦しく感じて、意識が遠のいていった。

？深く暗い水の中を泳いでいる感じがする。これが、夢だと分かっているのに、私は目が覚めることは無い。

？目が覚めても、良いことなんてない。だって、とても怖いのだもの。

？頭上から、誰かが私を呼ぶ声がする。上を見上げても暗闇で何も見えない。

？もう一度、力強い声で名前を呼ばれる。優しい声だと分かっているけれど、この声に答えて良いのか迷う。怖い思いは、もうしたくない。

「タマキ、シドウタマキ。私の声に応えて」

？知らない声が私の名前を呼んだ。優しい女の人の声だ。

「誰？」

「シドウタマキなの？」

？女の人は、私の答えに嬉しそうに聞き返した。

「私は椎堂環だけど」

「良かった、声が届いた」

？？女の人の和やかな笑い声が聞こえると、暗闇だった空間が一気に明るくなった。

？？何もない空間だけれど、辺りは薄いピンクとオレンジの混ざった温暖な色に変わった。

「私は、アキツシヒメ。貴女と話しがしたくてずっと呼びかけていたの」

？？自分の事を姫というだなんて変わった人みたいだ。

「なぜ、私と？」

「話せば長くなるわ。明日、コノハナ神社に来て。お願い！貴女に大事な話をするから」

？？何の話し、と聞き返そうとして急速に意識が水面上へ浮上する。水面から顔がでた、と思ったら目の前一杯に、不機嫌そうに眉を寄せた小野崎さんがいた。

「気がついたか」

?? 意識が戻ってしまっただけみたい。もう少し、話を聞いていたかったのに。

「冷やっとなさるな。……しかし、気がついて良かった」

?? 小野崎さんは、私を見下ろしたまま微笑んだ。

?? いつもよりも近い顔に、役者の様に顔の整った人が微笑むと、意識しなくても鼓動が高くなった。

?? 私の表情が変わったのを見て、小野崎さんは、満足そうに口の端を上げた。

「俺と一緒に暮らすか？」

?? ど、どうやったらそんな事が思いつくんですか！

「わ、私は……！」

「行く所無いんだろ？放っておいたら、あの馬鹿がお前の居場所を突き止めて何をするか解らないからな」

「でも、小野崎さんは、奥さんとか」

「俺は独り者だ」

「それって、同棲っていうんですよ！」

?? なんて、どうして、私が気を失っている時に何があったというの！？

?? ?

?? ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112p/>

環の市中見聞録

2011年4月3日07時09分発行